

平成30年度

研修記録



茨城県学校長会
県西地区校長会連絡協議会

「研修記録」発刊にあたって

県西地区校長会連絡協議会会長 倉持 美由紀



実りの秋をむかえ、各校においては日々の授業や研究発表会、文化祭・音楽会・部活動等、充実した教育活動が展開されています。しかしながら今年の夏は、災害級の暑さや大型台風さらに地震、洪水と、心配の絶えない日々が続きました。各地で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

ここに県西地区小・中・義務教育学校長150名が一堂に会し、平成30年度県西地区校長研究協議会が開催できましたことに深く感謝申し上げます。ご多用の中、ご来賓として茨城県県西教育事務所長栗原恵子様、県西地区市町教育長代表 筑西市教育委員会教育長 赤荻利夫様のご臨席を賜りましたこと、また講師として県西教育事務所の先生方にご指導いただきましたことに心からお礼申し上げます。

さて、子供たちを取り巻く社会は急速に変化しており、これまでの常識や判断では対応しきれない事態が起こっています。だからこそ本日のように、広い角度からご助言をいただき、また日頃の学校経営について、互いにひらき合い、学び合い、考えを深めることができて大変なことではないでしょうか。私たちの研修が、必ずや子供たちの笑顔と未来を生き抜く力につながっていると信じております。

日本全体の課題と思える「働き方改革」については、特に学校への関心が高いように感じます。すでに運用がスタートした「運動部活動の運営方針」には期待と注目が集まっています。また、本県の平成31年度小学校外国語教育の先行実施をはじめ、新学習指導要領の実施に向けて、クリアしなければならない課題が満載です。さらに、自然災害への対応についても「自分の命を自分で守る」スキルと心構えを子供たちにしっかり身につけさせなければなりません。さまざまな物事を同時に扱い、多くの関係者が納得し意欲を持って進められるようにするには、大胆な発想の転換が必要なのではないでしょうか。

県西地区校長会連絡協議会では、第11期長期研修計画の4年目として「地域の信頼と期待に応える経営力の向上」「教職員の資質能力向上と人材育成を図る研修体制の確立」の2点を研修の視点として取り組んでいます。今回の研修会では研究主題を「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」としました。分科会において、貴重なご提案をいただきました神大実小学校長 渡辺信之先生、関城東小学校長 白石久美子先生、大形小学校長 宮田真理子先生、結城南中学校長 黒田光浩先生、総和中学校長 町田裕行先生には、心より感謝申し上げます。実践に基づいた素晴らしい提案を受け、各分科会で熱心な協議が行われました。助言者の先生方からの的確でていねいなご指導をいただき、さらに研修が深まりました。学校経営に役立つ示唆がたくさん得られたことだと思います。

また、講演におきましては「決断～全盲のふたりが家族をつくるとき～」の演題で、弁護士の大胡田誠先生、音楽家の大石亜矢子先生ご夫妻のお話を伺いました。明るく前向きな生き方、子育てや家事のクスッと笑えるエピソード、まっすぐで澄み切った歌声に心搖さぶられました。また「助けて」と言えることの大切さをあらためて肝に銘じました。亜矢子先生の誘いで、全員が声を合わせた「ふるさと」、しみじみとものおもう時間となりました。会場いっぱいに鳴り響いた拍手は、ことばにならない感謝の思いにあふれています。

本研修会は、県西管内全校長がともに研修する貴重な機会であり、互いに校長としての意識を高め合い学校経営に役立たせるものと考えます。また、この研修記録には、学校が直面している諸課題の解決のためのヒントが数多く含まれています。この仕事の良さを実感しながら、さらなる経営改善に生かしていきましょう。

結びに、「県西地区校長研究協議会」の開催にあたり、計画並びに準備・運営、研修記録の作成等にご尽力いただきました県西校長会研究委員の先生方に深く感謝申し上げます。

目 次

県西地区校長研究協議会記録	-----	1
第1分科会（小学校）	-----	2
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 「ひらく」と「つなぐ」をキーワードとして —		
○ 研究協議・講師指導		
第2分科会（小学校）	-----	4
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 基礎・基本の定着を軸に、意識化を図る —		
○ 研究協議・講師指導		
第3分科会（小学校）	-----	6
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 人の役に立つ喜びを知る子の育成を目指して —		
○ 研究協議・講師指導		
第1分科会（中学校）	-----	8
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 環境のせいにするな！ OB校長のささやかなチャレンジ！！ —		
○ 研究協議・講師指導		
第2分科会（中学校）	-----	10
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 生徒・職員が生き生きと輝くための変革の第一歩 —		
○ 研究協議・講師指導		
教育講演会	-----	12
演題 「決断－全盲のふたりが家族をつくるとき－」		
講師 大胡田 誠 先生 大石亜矢子 先生		

平成30年度 県西地区校長研究協議会記録

- 1 期 日 平成30年10月16日(火)
- 2 会 場 茨城県県西生涯学習センター
- 3 主 催 茨城県学校長会 県西地区校長会連絡協議会
- 4 目 的 茨城県学校長会の活動目標を踏まえて、学校経営の創意に視点を置き、当面する諸課題について研究協議し、施策の具体化を考究するとともに、校長としての資質の向上に資する。
- 5 研究主題 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」
- 6 参 加 者 県西地区小・中・義務教育学校長 150名
- 7 講 師 茨城県県西教育事務所 人事課長 加藤 次男 先生
学校教育課長 吉田 浩康 先生
管理主事 酒寄 亨一 先生
管理主事 石塚 浩司 先生
主任指導主事
兼生徒指導班長 氏家真理子 先生
- 8 来 賓 茨城県県西教育事務所長 栗原 恵子 先生
茨城県市町教育長代表 赤荻 利夫 先生
茨城県学校長会副会長 鈴木 悟 先生
- 9 日 程 受付 12:30~12:50
全体会 13:00~13:40
分科会 13:50~15:10
(小学校3分科会、中学校2分科会)
講演会 15:25~16:45
- 10 全体会(開会行事) 13:00~13:40
(1) 開会のことば
(2) 県西地区校長会連絡協議会会长あいさつ
(3) 茨城県学校長会会长あいさつ
(4) 来賓あいさつ
茨城県県西教育事務所長 栗原 恵子 先生
茨城県市町教育長代表 赤荻 利夫 先生
(5) 来賓及び講師紹介
(6) 日程説明及び会場案内
- 11 教育講演会 15:25~16:45
演題 「決断ー全盲のふたりが家族をつくるときー」
講師 大胡田 誠 先生 大石亜矢子 先生

小学校 第1分科会

司会者 坂東市立逆井山小学校 柴山 聖徳
提案者 坂東市立神大実小学校 渡辺 信之
記録者 坂東市立飯島小学校 宮川 敬子
講 師 県西教育事務所管理主事 酒寄 亨一 先生



【協議題】 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」
— 「ひらく」と「つなぐ」をキーワードとして —

坂東市立神大実小学校長 渡辺 信之

【提案趣旨】

1 はじめに

学級数 13、児童数 242 名、教職員数 19 名の中規模校である。三世代同居の家庭が多く、安定した地域である。地域の結び付きも強く、地域全体で子供たちを育てる意識が高い。

2 学校の現状と課題

- ・一人一人の思いや考えを深め、表現する力を伸ばす必要がある。
- ・不登校傾向のある児童が数名いる。チームでの迅速な対応に努めている。
- ・中堅教員が少なく、ベテラン教員と若手教員の指導力に差が見られる。
- ・「人材育成と学校全体の活性化」を推進するために、ベテラン教員のノウハウや本校のよき伝統を「ひらく、つないでいく」必要がある。

3 「ひらく」と「つなぐ」をキーワードにした取組

(1) 学年・学級担任の配置及び校務分掌の工夫

- ・ベテラン教員と若手・ミドル教員を組み合わせ、学年及びブロックのチームとして機能するよう学年・学級担任を配置した。
- ・研究主任等、重要な校務分掌に若手教員を配置し、ベテラン教員をその補佐に置いた。

(2) 「確かな学力」の育成のために

- ・授業における「主体的・対話的で、深い学び」の探究
- ・教師同士が互いに学び合う主体的な研修の推進
- ・自らの考えを深め、判断し、表現する力を育成する指導の充実

NIE 教育の充実→国語科や社会科の授業を中心に、考える根拠となる新聞を活用

多面的・多角的な見方・考え方を認め合い、主体的・対話的な学びに

(3) 「豊かな心」の育成のために

- ・児童一人一人の心の居場所となる学級づくりの推進

Q-U テスト、「いきいき会議」の効果的活用

- ・自己有用感、自己存在感を味わえる学級経営の工夫、支持的・向上的学級集団の育成
- 認め合い励まし合う場の設定→市陸上記録会練習に 5 年生も参加、6 年生がよきモデル
- ・体験的な活動の重視(文化芸術、郷土教育)

(4) 「健やかな身体」の育成のために

- ・健康・安全教育の充実

4 年生の安全マップづくり→校内に掲示し全学年で共有、授業参観時に保護者に伝える

(5) 「家庭・地域との協働、学校間連携の充実による地域とともにある学校づくり」のために

- ・「魅力ある学校づくり」一小中・小小の連携を重視した教育活動の展開
- ・PTA、子ども会育成会、交通安全母の会、その他関係機関との積極的な連携の推進
- 神大実地区ボランティア「見守り隊」や「こどもを守る 110 番の家」等との連携

4 おわりに

よきモデルが子供たちや教職員の成長につながる。「よい子が育つのは、この学校の伝統です。」「よい先生が育つのも、この学校の伝統です。」と共に言えるような学校でありたい。

【研究協議】 ※質：質問、答：答え、発：発言

発 OJT の機能が働くよう学校経営を工夫し、若手教員を育てると共にベテラン教員のやる気も高めている。

質 NIE教育以外に、若手の人材育成をどのように進めているか。

答 昨年度の主任が若手主任の手助けをするなど、先輩と若手の連携がスムーズに行われている。

質 限られた人員の中で配慮を要する児童への支援体制づくりをどのように進めているか。

答 「早く・きちんと・みんなで」を合言葉に進めている。ケース会議で対応を明確にし、職員間で共通理解を図り、学校全体で動きが取れるようにしている。

質 地域のボランティアの層が厚い。地域への配慮はどのようにしているか。

答 近隣に分館施設があり、様々な機会に出向き学校の様子を伝えている。パトロールの際、見守りの人と会話をし、学校行事にも招待する。地域と学校をつなぐ機会ができるだけ多くとる。

発 授業改善を進めながら若手の人材育成を図っている。1学年3クラスの規模を生かし、提案的模擬授業、訪問による指導、改善した模擬授業へと、クラスからクラスにつないでいる。

発 若手とベテランの力量の差は大きい。若手の困り感を把握し、それに答えるためにベテランが手本を示すなど、本音で語れるOJTを進めるようにしている。



【講師指導】

○ ノウハウの継承

- ・ベテランと若手・ミドル教員を組み合わせて、教員の配置と校務分掌の工夫に取り組んだ。ベテラン教員の技術と思いを、余すところなくひらき、若手につないでいる。
- ・重要なポストにあえて若手を起用し、補佐にベテラン教員を配置した。若手のアイデアを生かすとともに、やり遂げたことに自信を持たせることにつながる。
- ・年度当初の職員会議や始業式において取組のねらいをしっかりと伝え、その後も進捗状況を直接語っている。

○ 確かな学力の育成

- ・NIE教育に取り組み、国語科と社会科を中心に考える根拠として新聞を活用している。多面的・多角的な考え方を認め合うことで、主体的な学びにつなげている。子どもたち同士の「ひらく」「つなぐ」実践である。

○ 豊かな心の育成

- ・市内陸上競技会に向けての練習に5年生が参加した。次年度の活躍を意識しての参加であるが、ねらいは、5年生に真剣に取り組んで活躍している6年生の姿を近くで見せることである。5年生は6年生をモデルとして捉える。6年生から5年生へ、神大実小学校の文化を、ひらき、つないでいる。そのことが陸上記録会後の5年生から6年生へのメッセージに凝縮されている。

○ 文化面、運動面でも大きな成果

- ・H30年度の全国学力・学習状況調査児童質問紙や学校評価においても、肯定的意見が多数を占めている。
- ・大きな成果を上げている要因は、子どもたちや教職員が成長できる環境がきちんと整っていることが挙げられる。学校の伝統は神大実小学校の強みである。

○ 校長のリーダーシップ

- ・「ひらく」「つなぐ」を中心とした取組は、これまでの学校経営において、代々の校長が日々とつないできた。歴代の校長が、意図してよい子の育つ学校風土を創り上げてきた。
- ・校長がリーダーシップを取り、明確なビジョンを示して学校経営を進めることで、教職員、児童が育つ学校になる。
- ・様々な教育課題への取組が求められているが、教職員の資質能力を向上させ学校全体を活性化させることが重要である。「よい子が育つ」「よい先生が育つ」学校を校長が創り上げていくことが求められている。

小学校 第2分科会

司会者 筑西市立川島小学校 飯泉 知那美
提案者 筑西市立関城東小学校 白石 久美子
記録者 筑西市立嘉田生崎小学校 寺田 明彦
講 師 県西教育事務所管理主事 石塚 浩司 先生



【協議題】 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 基礎・基本の定着を軸に、意識化を図る —

筑西市立関城東小学校長 白石 久美子

【提案趣旨】

1 研究主題の副題にある「意識化」とは

本校の課題である「学力向上」と「基本的生活習慣の定着」への対応について、組織体制整備のための取組に対する教職員、児童、それに伴う保護者や地域の意識向上である。

2 本校の学校経営の基調

関わり合い・認め合い・支え合い・学び合いの頭文字をとり、「かみさまの合い（愛）言葉」として取り組んでいる。寄り添い、自分と共に相手を大切にする学校づくりを目指している。

3 本校の実態

- ・全児童数352人、普通学級12学級、特別支援学級4学級、他に日本語指導教室がある。
- ・PTA会長はリーダーシップがある。PTAの委員会活動がなくボランティアである。

4 取組の実際

(1) 教職員の意識改革

- 「学校経営のマニフェスト」を教職員に配布した。児童の指導には教職員の心の安定が大切であり、このマニフェストは効果的である。
- 学校業務改善シートにより、各ブロックで出されたものを企画会で検討し改善した。
- 専門性を生かした教科指導や少人数指導（習熟度別指導）、組織的な研修体制整備の時間の確保するなど、教職員の学力向上への意識化を図っている。
- 「生徒指導上の実践内容について」を共通理解したり、「スタッフルーム」の発行等により若手教員の育成を図ったりしている。

(2) 児童の基本的生活習慣定着のために、保護者、地域を巻き込んだ意識向上

- 5つの習慣の定着に向けた組織体制を整えるためには、児童、教職員、保護者の協力が必要であり、「夢現カード」は効果がある。児童、保護者、教職員の意識が高まってきた。
- あいさつの改善に向けて、あいさつをした児童にシールを配ったり、6年生のボランティアによるあいさつ運動である「あいさつレンジャー」に取り組んだりしている。
- 「東っ子まつり」でも、保護者が主体となって児童のあいさつや態度を評価している。
- PTAの委員会を立ち上げる必要性がある。PTA会長が来年度替わることをきっかけに、新しいPTA委員会「東っ子お助け隊」が発足する予定である。
- 「いじめストップ！絆づくりプロジェクト推進モデル学区」として、関城中学校区でいじめのない学校づくりを児童生徒中心に進めている。6年生が積極的に取り組んでいる。

5 成果と課題

<成果>○学校評価では、肯定的回答が増え、少しはあるが成果が見られている。

- 学習に意欲的に取り組む（特に算数科の少人数）児童が増えている。
- 5つの習慣の定着については、「夢現カード」の活用により保護者も一緒にになって考える体制ができつつある。
- PTA活動の活性化にもよい影響が出てきている。

<課題>○教職員や児童の意識の持続化である。組織体制も整備したが、やはり一人一人の絶え間ない工夫がなくては意欲向上には結びつかない。

【研究協議】 ※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言

司 発表に対する質問をお願いします。

質 P T A 委員会の再発足に対する学校からの働きかけは？

答 現 P T A 会長は 8 年目である。委員会がないので、声かけて仲間同士が集まって活動しているが、保護者はそれぞれ意見をもっている。学校からは、みんなにやってもらうことで P T A の役割や学校を知ってもらえるということ、6 年間に 1 度は誰もが経験できるようにすると良いのではという考えを伝え、再発足に進んでいる。



質 生活習慣の定着に向けた「夢現カード」の、5つの習慣の洗い出しへどうやったのか。

答 「あいさつ」は、近隣校と差が大きいため、「姿勢」は、学力向上に結びつくため、「くつ」は、サンダルをバラバラに並べていた児童の実態から、「手伝い」は、子どもと親をつなぎ、子どもの成育に役立つため、「家庭学習」は、学力向上のためである。

質 「夢現カード」に対する校長と担任の共通理解はどうしているのか。

答 意識が高い教職員は、「夢現カード」の話題を口にしている。校長と担任が会話する中で、担任の意識が向上するケースもある。校長から、直接児童へ声かけをすることもある。

質 「夢現カード」の取組が月末であるが、その他の期間の意識付けはどうしているのか。

答 揭示物を貼ったり、朝会で発表させたりして意識付けをしている。マンネリ化を防ぐため、強弱を付けながら意識付けを図っている。

司 それでは、1つ目のテーマを「教職員の意識改革のための取組」として研究協議を始めます。

質 学校業務改善シートで、業務改善が必要な事柄の優先順位はどのように決めているのか。

答 トップダウンにならないように、まずは先生方から意見を出してもらうようにしている。最終決定は、校長、教頭、教務主任がしている。

司 次に、「保護者及び地域への意識改革のための取組」で何かありましたらお願ひします。

質 学校で重点化したいことは、トップダウンで下ろしてボトムアップを図っていくこともある。

関城東小で重点化したいことはどんなことか。

答 児童の実態に応じて、先生方が寄り添った指導をしている。保護者も学校を頼りにしている。個々に応じた寄り添い方を先生方にお願いしている。

発 教職員の意欲向上に向けて先生方を認めている。校長は学校経営にこだわりをもち、そのこだわりに合った取組をしている先生を褒め、意識化を図っている。

【講師指導】

- 「か・み・さ・まの合い言葉」は、強烈に印象に残った。
- 多様な人との出会いや経験（チーム学校）が本当の生きる力を育み、多様な社会で生きる人を育成する。そのために、今、学校でできることは、①先生方の専門性を生かす ②学校のマネジメント機能（P D C A サイクル） ③人材育成の視点 の 3 点である。これらを教育課程の中に落とし込み、外部の力も加わると、子どもの教育もしつつ先生方も育つ。これが社会に開かれた教育課程の発想である。
- 発表の素晴らしいところは、業務改善シートなどをもとに実態を正確に把握してから実践がスタートしていることと、教職員のアイディアを学校経営に生かしていることである。人材育成の視点からは、若い先生方からの提案に対し、質問を返して育していくことが大事である。
- 学力向上の文化が定着している学校は、例えば出張で得たことを模造紙にまとめ、職員室に貼るなど、効率的に教職員の共通理解を図る実践が多くみられる。
- 基本的な生活習慣は、当たり前のことと当たり前にすることであり、当たり前を継続することで特別な力になる。例えば、あいさつは、継続することで相手の表情から相手の気持ちを察してできるようになる。物事を突き詰め、意味を指導してほしい。
- 教育は、児童一人一人にどのように関わるかで成果が大きく左右される。校長の強いリーダーシップと明確なビジョンのもとに、全職員が一丸となって、更に子どもたちの生きる力の育成に努めていただきたい。

小学校 第3分科会

司会者 下妻市立上妻小学校 比企 明郎
提案者 下妻市立大形小学校 宮田真理子
記録者 下妻市立高道祖小学校 荒木久美子
講 師 県西教育事務所学校教育課長 吉田 浩康 先生



【協議題】 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」
— 人の役に立つ喜びを知る子の育成を目指して —

下妻市立大形小学校長 宮田 真理子

【提案趣旨】

1 はじめに

学校に関わる多くの方々の思いに寄り添いながら、児童の様子、地域や保護者の実態、教職員の考え方や思いを把握してきた1年だった。今年度は、この間に温めてきたことについて、教職員と話し合いをしながら実践を試みている。

2 学校の概要

- ・保護者は学校に協力的で、クレームは少ない、保護者同士のつながりは希薄である。
- ・豊かな農業地域である。鬼怒川沿いに位置し「水辺の楽校」としてワンドが整備されている。
- ・児童は、明るく、のびのびしており、素直でよく働く。
- ・教職員の年齢構成はバランスがとれている。ベテランと若手の関係なども良好である。

3 本校の課題と課題解決のための手立て

(1) 本校の課題

- ・子どもたちの主体性が乏しい。家庭学習の定着率が低い。
- ・子どもたちのよさが発揮されていない。
- ・教職員に余裕がなく、地域活動などへの負担感が大きくなっている。

(2) 課題解決のために

【子どもたちや地域のよさ、職員のよさを生かし、自己有用感を高める取組】

① 学校、児童、地域、職員のよさ、校長の思いを伝達

- ア 校長通信「せいりゅう」の発行…教職員への労いや感謝、取組のよさや今後の課題等
- イ ホームページ「大形小ニュース」の更新…保護者・地域への発進
- ウ 地域のよさを知るための総合的な学習の時間の改善…学習の趣旨や目的の共通理解
- エ 学校行事、全校集会時の校長の話の工夫…子どもたちのよさを可視化して称賛する

② 全員で考える学校経営案、合い言葉、組織目標の設定

- ア 児童生徒保護者地域の強みと弱み(SWOT分析)の共有…強みを生かす視点をもつ
- イ 学校経営案、グランドデザインの作成…課題の共通認識と主体的な取組への意欲喚起
- ウ 合い言葉と組織目標の設定…共通理解、共通実践への手立て

③ 特別活動の充実

- ア 代表委員会の設置
- イ 縦割り班清掃による清掃活動…「よく働く子どもたち」という強みを生かす取組
- ウ 地域と連携した活動「花と一万人の会ジュニアスタッフの取組」…地域活動を活かす

【家庭での学習を推進するための取組】

- ① 「親子で学びタイム」の改善…親子のコミュニケーションを増やし、保護者同士の交流も活性化する

4 終わりに

子供のよさを生かしたいという思いが形になりつつある。「人の役に立つ喜びを知り、自分を伸ばそうと頑張る子供たちを育て、社会で生きる、地域に根付く人材に育つよう」今後も本校だからできることに全職員で前向きに取り組んでいきたい。

【研究協議】　※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言

質 子どもたちに、「人の役に立つ喜び」「自己の成長」などを実感させる有効な手立てを知りたい。



答 集会等の「校長講話」を活用し、成長の様子を視覚化して示している。アンケート結果などを昨年度と比較してグラフ化して見せることがある。一生懸命に働いている場面を写真に収め、スライドショーなどで見せて称賛したりしている。ジュニアスタッフの活動の際は、帽子をかぶって活動させることで地域の方からも声をかけていただく機会が増え、子どもの意欲は高まっている。

質 「親子で学びタイム」を実施することで、どんな変容があったか。

答 親子で学ぶ楽しさを知ったり、学ぶことについての視点が変化したりしてきた。今年度初めにワークショップでお互いにどんなことを学んでいるのかを交流する機会をもったので、親同士のコミュニケーションが増え、つながりもできてきた。

発 教職員が負担だと感じる「ジュニアスタッフ」の活動を達成感に変えていく手法がすばらしい。なくすばかりでなく活用する方向で実践しようとしている。

答 地域からの要望にただ応えるだけでは「やらされ感」が強く負担感が増す。学校が主体となって、地域の活動を活用するという意識を持つことが大切だと思う。子どもたちが生かされるよう提案することも必要である。地域の活動はなくせない。それなら生かす方向で考えていく。

発 地域活動を教材として生かすという発想の転換が必要だと感じた。やるからには得るものとか、地域の教材や資源を積極的に活用する・生かすという視点を持ちたい。

発 さまざまな手立てを用いて地域や子どものよさを生かす取組がすばらしい。「人の役に立つ喜び」「地域に生きる子ども」を意識されており、学校に対する深い愛情を感じる。

質 グランドデザインの作成を全職員で行うということだが、どんな手順で行っているのか。

答 12月初旬にアンケートを取り、本校の「強み・弱み」をまとめる。企画会、プロジェクト会で校長作成の経営案を提示し、意見聴取、文言の修正を行う。話し合う時間がなかなか取れないアンケート集約なども含め練り合いを複数回行う。3月末に発表という流れである。

発 今あることをいかに効果的に活用していくかという視点が大切だと感じた。

【講師指導】

○ 課題把握から解決までのプロセスを丁寧に行っている。先生方との共通理解を大切にしていることがよく分かる。

- ・学校評価やSWOT分析、教職員のつぶやき等から、学校の実態把握が適切に行われている。
- ・リソースを見つけ出し、強みに焦点を当て、強みを伸ばすという前向きな取組である。
- ・全職員共通理解のもとに創られたグランドデザインや組織目標、合い言葉は同僚生を高める。

○ 目指す子どもの姿「人の役に立つ喜びを知る子」が明確である。自己有用感を高めることが大切だという校長の考えが示され、目標達成のための取組が多彩である。

- ・情報発信「校長室通信」「ホームページ」
- ・「鬼怒川」を核としたカリキュラムマネジメントの構築

カリキュラムデザイン、RPDCAサイクルの確立、内外リソースの活用

カリキュラムデザインについては、単元配列までをも考慮していく必要があろう。

- ・子ども主体で活動できる特別活動の充実が図られている。
- ・教職員の意欲を高めるための理解啓発を図るとともに、業務改善への取組も行われている。

○ 成果と課題を明らかにし、短いスパンで改善を図る仕組みが重要である。

- ・「親子で学びタイム」の実践と改善のようなマネジメントサイクルの確立

○ 膨大なデータから課題を見いだし、教職員の理解をもって改善を図っていくこと、適材適所を実現するために、各自のスキルアップを図り達成感が得られるようマネジメントをしていくことが経営者として大切なことである。自らもスキルアップしようとする意欲を持ち続けていきたい。

中学校 第1分科会

司会者 結城市立結城中学校 渡辺 昭登
提案者 結城市立結城南中学校 黒田 光浩
記録者 結城市立結城東中学校 塚原 紗江
講師 県西教育事務所主任指導主事兼生徒指導班長 氏家 真理子 先生



【協議題】 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」

— 環境のせいにするな！ OB校長のささやかなチャレンジ！！ —

結城市立結城南中学校長 黒田 光浩

【提案趣旨】

1 はじめに

「環境のせいにするな！」これは、学力向上の一環として実施した講話で、進学塾の塾長が本校生徒に話した言葉である。校長として40数年ぶりに戻った母校は、穏やかで落ち着いていた。ただ穏やかで落ち着いているからこそ、進歩がないのが生まれ育ったこの地域の特色でもある。「環境のせいにするな！」という言葉は、生徒ではなく全職員に感じてほしい言葉である。現在、環境のせいにしないためのささやかなチャレンジに取り組んでいる。

2 学校の概要

- ・生徒数385名、通常の学級11、特別支援学級5の中規模校である。
- ・地域は3世代同居家庭が多い。
- ・学校は、昼休み学年を問わず、元気に外に出て遊ぶような穏やかな雰囲気がある。
- ・不登校の数は増加傾向にある。

3 実践内容（環境のせいにしないためのチャレンジ！）

(1) 学校経営の取組の重点から

- ① 主体的で対話的な深い学びへの授業改善による学力向上
 - ・5段階学習過程（結南スタイル）の徹底、52分授業の実施による適用練習の時間確保、家庭学習の手引きの改訂
 - ・進学塾との連携（進学塾長による講演会、進学塾講師による学習会、受験直前学習会）
 - ・アーリーワーク・レイトワーク・セルフワーク、地域未来塾の実施
 - ・英語学習の推進
- ② 豊かな心の教育の推進
 - ・「特別の教科 道徳」の先行実施（H30年度 国立教育政策研究所指定校）
 - ・いじめの未然防止（SNS関係を含む）と早期発見・対応
 - ・生徒会活動の充実
- ③ 健康と体力の向上
 - ・茨城県学校給食研究推進校（H27・28）の継続研究の推進
 - ・教育的部活動の推進
 - ・薬物乱用防止教室等の実施
- ④ 地域に信頼される魅力ある学校づくりの推進
 - ・結城南中学校区小中一貫教育協議会の実施
 - ・学区内小学6年生を対象とした「オリエンテーションキャンプ」の実施
 - ・地区PTA協議会の開催
 - ・山川文化会館との連携
 - ・紬のふるさと体験授業の実施

4 終わりに

地元出身校長のメリットを最大限に活用（利用）し、今後も環境のせいにすることなく旧態依然とした環境を打破していきたい。

【研究協議】　※質：質問、答：答え、発：発言

質 52分授業を実施して、どのような効果があるか。

答 授業の最後の適用練習の時間を確保できるようになった。教職員の時間に対する意識に変化が見られ、授業の中で確実に学習内容を定着させようという意識が高まってきた。

質 昨年の県学力診断のためのテストにおいて、1年生の英語で向上が見られた。どのような手立てが効果的だったか。

答 本市は、小学1年生から英語の授業「レッツ・エンジョイ・イングリッシュ（LEE）」を実施しており、中学校英語科へのスムーズな移行がなされている。

発 学力向上には、授業の中での学習指導の充実が重要であり、学年主任のリーダーシップや若手教員の育成が不可欠である。

発 授業力ブラッシュアップ研修の重点校（数学）になり、全職員で授業力向上や指導法改善を行っている。

発 「結南スタイル」の徹底がすばらしい。本校では、国語辞典の活用や語彙集め学習などを通して、書く力が向上してきている。

質 どのように家庭学習の充実を図っているか。

答 復習を中心とした家庭学習に力を入れている。進学塾の塾長の講話で、エビングハウスの忘却曲線理論に基づいた勉強法や効率のよいメモの取り方等がとても参考になった。



【講師指導】

1 学校組織マネジメントによる学校経営の工夫改善

(1) 視点1 「変える」

教職員、生徒の学習に対する意識改革を図るために、進学塾の塾長の講演会を校長が企画する。結南スタイルの定着、52分授業による適用練習時間の確保、自主的に家庭学習に取り組む習慣の育成などに取り組む。

⇒常に新しい教育、質の高い教育を高める学校をつくるために率先して行動する。（リーダーシップ）

(2) 視点2 「つなぐ」

学校を「変える」ために、その「強み」（地域の資源：人、もの、ネットワーク）から「弱み」の解決策を見いだし、つなぎ、ネットワーク化を実現する。

⇒外部との連携の重要性を認識し、具体的に行動できる。（アクション）

児童生徒の学習意欲、教職員の勤務意欲を高める環境づくりに努める。（コミュニケーション）

(3) 視点3 「はぐくむ」

ミドル・アップダウン・マネジメントによる人材育成

教務主任、研究主任が中心になって、学習相談の企画・運営・担当職員の体制づくりを指示する。

⇒ミドルリーダーを中心にアップ（管理職への具申）とダウン（メンバーへの指導、助言、指示等）をうまくかみあわせながら、組織をマネジメントする。

2 今後の取組に向けて

【効果のある校内研修のための条件】

- ① 学校教育目標及び組織目標を踏まえた研修・研究のねらいを設定
- ② 研修・研究の目的に即した内容・方法・形態・日程等を確定（組織的・計画的に）
- ③ 研修・研究推進上の問題点や阻害条件を確認
- ④ 問題点や阻害条件をどう克服するか、解決するかを明確に
- ⑤ 客観的調査、学校評価、教員評価等の結果を全職員で分析し、成果と課題、改善策を共有（RPDCAマネジメントサイクルで）

中学校 第2分科会

司会者 古河市立総和北中学校 坂入 秀範
提案者 古河市立総和中学校 町田 裕行
記録者 古河市立総和南中学校 齋藤 雅浩
講 師 県西教育事務所人事課長 加藤 次男 先生



【協議題】 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」 — 生徒・職員が生き生きと輝くための変革の第一歩 —

古河市立総和中学校長 町田 裕行

【提案趣旨】

1 はじめに

昨年度、新任校長として本校に赴任し、初めて校長として校舎に足を踏み入れた時に、部活動の練習で登校してきた生徒がさわやかな挨拶で迎えてくれたことは今でも忘れない。基本的に、何事にも明るく元気に取り組む生徒たちであったが、学習面・生活面で生徒・教職員から様々な課題が見られ、「よりよく考え、判断し行動できる生徒の育成」という学校教育目標を実現するために、生徒・教職員が生き生きと輝くために、平成29年度から現在にかけて実践してきたことをまとめてみた。

2 学校概要 (平成29年度)

- ・生徒数 559名、学級数 20（通常学級 17、特別支援学級 3）
- ・生徒は明るく元気であるが学校生活において、けじめのつかないところがあり、始業時間が過ぎても廊下を歩く生徒が見られ、集会時に集合や静寂に時間がかかる。
- ・教職員に反抗的な態度をとる生徒が数名いる。
- ・不登校生徒（欠席30日以上）は、全校25名でフリースクールと連携を取っている。

3 実践内容

(1) 変革の第一歩 (その1) 平成29年度末

①学力向上を目指して

- ・「+5を目指すための1時間ごとの取り組みと具体的な授業改善」を各教科部会で話し合う。
- ・教科部会を時間割の中に位置づけ、情報の共有を図る。
- ・「息吹タイム」に代わる学力向上につながる取り組みを模索する。

②豊かな心の育成を目指して

- ・規律ある生活を目指して、午後からの授業に集中できうるような週時程の変更に取り組む。
- ・何事にもまじめに取り組む生徒の育成を目指し、黙働自問清掃に取り組む。（結城東中視察）
- ・生徒・職員の安心安全のために、部活動の朝練を原則行わないことにする。

(2) 変革への第一歩 (その2) 平成30年度4月～

①学力向上を目指して

- ・+5を目指す教科指導を目指し、1時間ごとの取り組みや具体的な授業改善に取り組む。
- ・「知識活用型授業」を全教科実施し一斉授業からの脱却に取り組む。
- ・学習に向かおうとする心を育てるために、生徒たちの工夫したノートを各学級3点選んで展示し、表彰するなど、生徒の努力をたたえている。また、週時程の変更により、「チャレンジテスト」を実施し、合格者を表彰している。

②豊かな心の育成を目指して

- ・規律ある生活を目指して、1時間目の移動教室がない教科に時間割を変更した。
- ・何事にもまじめに取り組む生徒の育成を目指し、「無言清掃」を継続している。
- ・生徒・職員の安心安全のために、部活動の朝練は実施せず、余裕をもって登校できている。また、警察等の関係機関との連携をさらに継続している。

③円滑な接続を目指して、学区内の小学校5校と授業参観等を通して情報交換を行うとともに、高等学校とも本校の授業研究会の案内により、交流を進めている。

4 終わりに

生徒達が社会に出て生き生きと活躍し、前を向いて明るく楽しく生活できるように総和中学校時代にその基礎を育てていきたい。職員と協議し、深く考え判断し、今後とも実践していく。

【質疑応答】

質 校長として新しい学校に赴任して、自分の学校経営の方針を教職員に示し、それを理解させ、具体的に生徒に指導に当たらせることは、たいへん難しいことであり、実際の取組での苦労したことについて、聞きたい。

答 考えを示すタイミングや、特に学力については、生徒の現状を数値化し、目標を明確にして、具体的な目標を数値で示すことが大切である。また、赴任してすぐには生徒の実情が把握できないので、ある程度の期間、時期を置いて、観察や記録を行い、タイミングを見て示すことが大事であると考えた。

質 学校文化を維持、継続しながら一点突破で掃除を徹底しようとする変革していくための勇気ある決断が素晴らしい。校長の片腕となる教職員を育てるためには、どんな苦労をしたのか。さらに学校独自の小中交流の派遣授業の取り組みにより、教師の意識改革につなげたことも素晴らしい。どのタイミングで教師にその考えを示したのか。

答 赴任した時感じた思いを目標に立て、変革していくことで結果として生徒の姿が変わることになることを数値で示し、いつ示したらよいのかを時期などのタイミングを考え、明確に示すことが大切であった。先進校視察にミドルリーダーを同行させ、実際に目で見て感じたこと、驚いたことを指導実践につなげられたことが良かった。

答 清掃・あいさつの大きさを感じている。上履きがなかった学校であったが、この4月から上履きを使うようになった。清掃の仕方をさらに進めていこうとしている。

【研究協議】 ※ 司：司会、質：質問、答：答え、発：発言

司 キーワードとしては「改革」「変革」。

赴任一年目にできること、数年計画で取り組むことを明確にして、グランドデザインに経営の方針を盛り込み、教職員に理解してもらうなど、各学校での取り組みをお聞きしたい。



答 校長として、二校目の赴任ということもあり、一年目から自分の運営方針をグランドデザインに示し、限られた任期の中ですぐに取り組んでいる。「目指す生徒の姿」を明確に示し、生徒に自信をつけさせたい。何事にも「チャンス、チャレンジ、エンジニアリング」で取り組んでいる。

答 赴任して、目にしたこと、生徒の姿を見たときに、今までの指導の成果がこの姿であると認識し、良いところとそうでないところを受け止め、そこからスタートした。

【講師指導】

○総和中学校小中交流派遣事業により

小学校の免許をもっている中学校の教員と中学校の免許をもっている小学校の教員を一日交流させたが、特に中学校側の教員が小学校の指導を経験して、「指導力の原点は授業」であることを深く感じ、その後の授業改善に意欲的に取り組んでいることは大変素晴らしいこと。

○学力向上をめざし、「+5」と数字で示したことは、目標が具体化で、自己評価しやすい。

○時間割に教科部会を位置づけたことは、時間を保障することができよかった。

○「息吹タイム」を3月でやめ、チャレンジテストに変えたことはタイミングが良かった。

○一校時に移動教室がないような時間割編成を行ったり、昼休みに時間を増やし、その後に清掃を行うなど、午後の週時程を変えたことで、「あわただしさ」を解消したこともよかった。

○校長のリーダーシップを發揮して、「より具体的な目標を掲げたグランドデザインの作成・発信」や「学校組織マネジメントによる学校運営の工夫」、さらに「学校組織全体としての指導力向上」に取り組んでほしい。

○「創意工夫を生かした特色ある教育活動の推進」、「一人一人の豊かな学びの実現に向けた教育活動の推進」「学校段階間を円滑に接続する教育活動の推進」にさらに各学校で取り組んでほしい。

【講演】

<演題> 「決断－全盲のふたりが家族をつくるとき－」

<講師> 大胡田 誠 先生 大石 亜矢子 先生

<講師プロフィール>

大石 亜矢子（おおいし あやこ）先生

- ・1975年、千葉県生まれ。男女の双子として早産で産まれる。1200グラムの極低出生体重児だったため、保育器の高濃度の酸素によって網膜が損傷する「未熟児網膜症」により失明する。
- ・2歳のとき、静岡県沼津市に移住。筑波大学附属盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）の中學部・高等部を卒業後、武蔵野音楽大学声楽科卒業。
- ・ソロによる歌唱のほか、ピアノの弾き語りによる演奏活動を行う。また、盲導犬の啓発活動などを行うかたわら、夫で全盲の弁護士の大胡田誠とともに「全盲夫婦によるトーク&コンサート」を各地で開催している。
- ・6歳と5歳の一男一女の母親。本名は大胡田亜矢子。

大胡田 誠（おおごだ まこと）先生

- ・1977年、静岡県生まれ。先天性緑内障により12歳で失明する。
- ・筑波大学附属盲学校の中學部・高等部を卒業後、慶應義塾大学法学部を経て同大学院法務研究科（法科大学院）へと進む。
- ・8年間かけて2006年、5回目のチャレンジで司法試験に合格。全盲で司法試験に合格した日本で3人目の弁護士になった。
- ・現在、つくし総合法律事務所に所属し、一般民事事件や企業法務、家事事件（相続や離婚など）や刑事事件に従事するほか、障がい者の人権問題についても精力的に活動している。
- ・著作に、松坂桃李主演でテレビドラマ化された『全盲の僕が弁護士になった理由』（日経BP社）、『今日からできる障害者雇用』（共著・弘文堂）がある。



<MEMO>

C

C

平成 30 年度

研究委員長	稻村 裕司（古河一中）
研究副委員長	大場 実（桃山学園）
研究副委員長	金久保敬二（境一中）
研修・記録委員長	根本 忠繼（結城小）
研修・記録委員	小森 孝夫（飯沼小）
研修・記録委員	佐々木英治（下結城小）
研修・記録委員	服部 仁一（水海道小）

